

中途盲ろう者のコミュニケーション変容の経験に関する研究

著者	柴? 美穂
学位授与年月日	2016-03-10
URL	http://doi.org/10.15083/00073213

博士論文（要約）

中途盲ろう者のコミュニケーション変容の経験に関する研究

柴崎 美穂

工学系研究科先端学際工学専攻

指導教員

福島 智 教授

「盲ろう」とは、視覚と聴覚の両方に障害がある状態のことをいう。盲ろうという状態は、医学的には視覚機能と聴覚機能の障害が合併した状態ということも可能であるが、盲ろうがもたらす困難とニーズは単なる「足し算」で測れるものではなく、そこには盲ろうゆえの独自性があるといわれている。

盲ろうを視覚と聴覚それぞれの障害の程度別に考慮した場合、一般的には「全盲ろう」（全く見えず、全く聞こえない）、「全盲難聴」（全く見えず、聞こえにくい）、「弱視ろう」（見えにくく、全く聞こえない）、「弱視難聴」（見えにくく、聞こえにくい）の4つのタイプに分けることができる。また、視覚と聴覚それぞれの障害が生じた時期を考慮した場合、「先天視覚障害・先天聴覚障害」「先天視覚障害・後天聴覚障害」「後天視覚障害・先天聴覚障害」「後天視覚障害・後天聴覚障害」の4つのタイプに分けることができる。これら障害の程度、発症時期の他に、原因疾患、生育環境等の多様な要因が複雑に絡み合うため、個々の盲ろう者の状況は極めて個別的が高い。

盲ろうという障害が、情報の獲得、コミュニケーション、移動において困難をもたらすことは、これまでも明らかにされている。中でも、近年は盲ろう当事者へのインタビューをもとにした研究が徐々に増加し、当事者の視点が重視される傾向がみられる。しかし、中途盲ろう者がコミュニケーションの変容をどのように経験したかを明らかにした資料はまだ少ない。

そこで、本研究では、中途盲ろう者のコミュニケーションの様相が変化していく過程を、盲ろう者の主観的経験に着目して理解すること、およびそれが盲ろう者の人生に与える影響を明らかにすることを目的とした。

本研究は、序論（第1章）、本論（第2章～第7章）、結論（第8章）から成る。

序論となる第1章では、既存の障害者研究および盲ろう研究を概観し、問題を提起した上で、本研究の目的を述べた。

本論（第2章～第7章）は、方法、結果および考察に該当する部分である。

第2章では、本研究で用いた方法を述べた。

本研究の方法は、3名の盲ろう者へのライフストーリー・インタビューを主軸としており、3層のステップから成る。第1に、3名の盲ろう者に筆者がライフストーリー・インタビューを行った。第2に、3名の盲ろう者のライフストーリーについて、他の3名の盲ろう当事者と筆者との「語り合い」による共同解釈を行った。ここでいう「語り合い」とは、聞き手の質問に回答者が答えるという一方向のインタビューではなく、1つのライフストーリーについて他の盲ろう当事者と筆者がそれぞれの経験を背景に対話し、ライフストーリーの解釈やそこから想起される経験の語りを加えていくことである。第3に、第1および第2ステップで得られたライフストーリーとその解釈について、盲ろう当事者でもあり研究者でもある福島智氏と語り合い、さらなる解釈を行った。

第3章から第7章までは、本研究で得られた結果を述べた。第3章、第4章、第5章では、3名の盲ろう者へのインタビューによって得たライフストーリーを記述し、それぞれのライフストーリーにおいて注目すべきテーマを抽出した。

第3章では、弱視難聴で後天視覚障害・先天聴覚障害の女性Aさんのライフストーリーを記述した。Aさんは、視覚・聴覚それぞれの障害が段階的に進行する中で、再三適応し直して生きてきており、そうした自身の人生を振り返って語る中で、「白杖を使い始めた」

「点字を学び始めた」ことが転機となったという意味づけを自ら行っていた。また、見えにくい、聞こえにくいという状態を「目も半端、耳も半端」という言葉で表現し、「半端」ゆえの困難を具体的に語った。

第4章では、弱視難聴で先天視覚障害・後天聴覚障害の男性Bさんのライフストーリーを記述した。Bさんは、視覚障害についても聴覚障害についても子どもの頃から緩徐に進行していたが、小学校から高等学校卒業まで適切な福祉用具を十分に得ることができない状態で生活していた。大学入学後に「障害補償」と「情報保障」という概念を知り、大学生活においてこの2つを概ね実現したことにより、「生きていくことに対しての自信を持つことができた」と語った。しかし、企業に就職後、「障害補償」と「情報保障」を得て健常者と互角あるいはそれ以上に生産性の高い仕事をしようという理想を抱いたにもかかわらず、この理想を十分には実現できず、現実とのギャップを自分の努力で補おうと「無理」をし続けるというジレンマをもって生きていた。

第5章では、全盲ろうで後天視覚障害・後天聴覚障害の女性Cさんのライフストーリーを記述した。生まれたときは障害のなかったCさんは、10歳代で完全に聴力を失い、40歳代で完全に視力を失った。自身が失聴後に習得した指文字という手段を家族が「覚えてくれない」ことへの怒りや、「家族が理解してくれない」ことへの不満を繰り返し語った。また、「他者の力を借りずに自分の力で立ち直った」「紙細工」と「歌」のおかげで立ち直った」という語りを繰り返しており、語ることによって「やりきれなさ」を打ち消そうとしているかのようであった。

第6章では、第3章、第4章、第5章で記述したライフストーリーについて、他の3名の盲ろう当事者と筆者が行った語り合いの結果を述べた。

第3章(Aさん)のライフストーリーについて、弱視ろうで後天視覚障害・先天聴覚障害の女性Dさんと筆者が語り合いを行った。Dさんは、Aさんと障害の経緯は類似するものの、聴覚障害の程度が異なる。Aさんの体験との間に共通性も非共通性もありながら、自身の「見えにくい」状況をAさんの「聞こえにくい」状況に置き換えて理解しようとする語りがみられた。また、中途盲ろう者が「盲ろう者」として生きるまでの「トンネル」が存在するという新たな解釈が提示された。

第4章(Bさん)のライフストーリーについて、弱視難聴で先天視覚障害・後天聴覚障害の女性Eさんと筆者が語り合いを行った。Eさんは、Bさんの実妹であり、障害の程度も経緯も、そして生育環境もBさんと類似している。Eさんは、Bさんと同様に子どもの頃十分に「通じる」という経験がなく、初めて「通訳」を受けて「通じる」という経験をしたことに衝撃的ともいえる感動を覚えたことを語った。自分の見え方や聞こえ方を自分で把握することが難しいこと、そのために、どこまでを「障害補償」で補うことができるか、どこからが「がんばること」で達成しうるものなのかという限界が明確でないことから、「できない」ことを自分の責任ととらえ、「がんばりすぎてしまう」というジレンマを語った。

第5章(Cさん)のライフストーリーについて、全盲ろうで後天視覚障害・先天聴覚障害の男性Fさんと筆者が語り合いを行った。Fさんは、Cさんと障害の程度は類似するものの、聴覚障害の経緯が異なる。Fさんは、障害のない自分の家族が指文字を「少しでも覚えようとした」ことに喜びを感じた経験を挙げ、Cさんの家族が「つたなくてもいいから」少しでも指文字を覚えてCさんに表していればCさんが怒りや悲しみを感じることはなかつ

ただろうと語った。また、周囲がFさんを意図的に無視しているのではないにもかかわらず、Fさんには周囲の状況の変化や会話が伝わらず、結果的には存在を無視されたと同然の事態が生じる、という経験が無数にあること語り、自分の存在を周囲から認められない状況へのCさんの怒りに共感を示していた。

第7章では、3名の盲ろう者A、B、Cさんのライフストーリー（第3章～第5章）および他の盲ろう当事者D、E、Fさんとの語り合い（第6章）について、盲ろう当事者でもあり研究者でもある福島智氏と筆者が行った語り合いによる共同解釈の結果を述べた。福島氏と筆者の語り合いを通して、話題が4点に焦点化された。1点目は、弱視難聴という「中途半端」な状態をもたらす困難についてである。2点目は、盲ろうになると周囲の「世界」とのつながりがもちにくくなる点である。3点目は、周囲とのつながりがもちにくいことが周囲から気づかれず、人としての存在を承認されにくくなる点である。4点目は、盲ろう者が過剰な努力を強いられる構造についてである。

結論となる第8章では、各章を総括し、総合的に考察を行った。まず、中途盲ろう者がコミュニケーションの変容を経験する中で、見え方、聞こえ方が周囲にとっても自分にとってもわかりにくいという問題を明らかにした。また、筆者が提起する「コミュニケーションの定位」という概念は、コミュニケーション関係を下支えする基盤となるものであり、盲ろうになるとそれが困難になることを論じた。

次に、コミュニケーションの変容が中途盲ろう者の人生に与える影響として、「健常者のペース」と「盲ろう者のペース」のギャップによる苦悩があることを述べた。また、見え方、聞こえ方が周囲にとっても自分にとってもわかりにくいこと、「コミュニケーションの定位」が困難になることから、「周囲の世界とのつながり」が希薄化、脆弱化することを論じた。コミュニケーション行為が十分に成り立たない状況が続くと、コミュニケーションの機会から疎遠になる可能性がある。そして、コミュニケーションを求める欲求自体が希薄になり、本来のその人の性格が積極的であるか消極的であるかにかかわらず、「世界」とのつながりを実感することが困難になるのである。

最後に、支援への示唆として、盲ろう者に働きかけて直接コミュニケーションをとるような支援が必要であること、および、盲ろう者が安心して暮らすことのできる世界とは、「(人としての)存在が承認され」、「コミュニケーションの定位が実現する」世界であることを述べた。